

崔書勉先生と私 「日韓談話室で学んでいる事」

(株) 国際マイクロ写真工業社 代表取締役 森松 義喬

● 「友好を育むサークル」ではない、

日韓談話室は 日韓の有識者たちが「談話する会」である。日韓双方が歴史を顧みてそれぞれの立場で意見を述べる。

ゆえに「緊張の場」が少なからず生じる。それでも毎々人が集まり談話を続ける・・・

● 二十七年前

現在 日韓談話室の中心人物である崔書勉先生との初対面、

「お父さんに孝行をするように！」と「力強い握手」をしていただきました。その第一印象があまりにも強く昨日の事のように思い出すことができます。「歴史資料を保存・複写する会社」の創業社長である父親に同行して、東京韓国研究院 崔書勉院長とお名刺交換をさせて戴いた時の事です。(一九八六年 港区三田の東京韓国研究院にて)

後日 崔書勉先生ご自身が「親孝行」をしたくともそれが叶わなかったご事情を知り「力強い握手」のお心お気持ち恐縮ながら伺えた気がいたしました。

● 閲覧室の主(ヌシ)

入社当時の私は、父親が創業した会社の営業部として主に記録保存機関(アーカイブズ)を回り、各アーカイブズ

の命に従いながら「貴重な記録」を「マイクロフィルム化して五〇〇年保存させる」作業を主としておりました。又それをアーカイブズのご指示に応じて「紙に複写する」「フィルムをデジタル化する」サービスも展開。

首都圏のおもだった史料館・資料館・図書館・文書館・博物館 および大学や各資料室等に出向いております。

崔書勉先生が外務省 外交史料館 閲覧室に毎々いらっしゃることに私は当初より気が付いておりました。

他のどの閲覧者よりも膨大な史料を山積みになされ、閲覧室の主（ヌシ）のような存在となっておられました。

外務省 外交史料館様において、当社では三十年以上前より史料のマイクロフィルム化と並行して「閲覧者のための複写サービス」を担当させて頂いております。

閲覧者の方々は崔書勉先生のような歴史研究・政治研究、又は出版関係・マスコミ関係の方々も居られ、最先端の複写技術等を深く理解した方も多く「より高い品質等のご要望」が上がります。又「特異な立場」にある方々もいらっしゃいますので必然と「特異なご要望」も生じます。様々な「ご要望」にこたえ続けるには更に品質を「ご要望」に近づけ 且つ短納期化するための「技術を開発する体制」が必要不可欠となります。それらの「蓄積」と「三方良しの精神」が高いで有効となり、結果として数多くの「ご要望」こそが会社の柱を築く大本となっております。

#### ●ガキ大将の雰囲気

崔書勉先生は忌憚なく「ご要望」を言われる複写申請者のおひとりなのであります。当時営業部であった私に「記録複写の納期まで二週間とあるが 待てない、五日でやってほしい」との強いご要望に「恐縮ながら 作業は複写申請の順番で行っておりますので五日の納品は厳しいです」「どうしても早くするように」「崔様がどちらの国の大臣様であったとしても複写申請の順番を守らなければ不公平となります」（私は当時 正義感溢れる二十代）

崔書勉先生は「なぜならばこの文献をもとに研究を急ぐ必要が、あるからである」とその詳細を 若造である私にも理解できるように実直にご説明いただけましたので、私は夜なべをしてでも五日で対応致しました。

後日 当時社長である父親に「崔書勉様はどのような方でしょうか」と尋ねたところ、日本と韓国の記録を中心に研究されており私が入社する以前から「特例として対応している」との事でした。

その当時の社長である父親も休日返上で「納期の短縮」や「高度な複写」などに対応していたようでした。

不思議なもので、私も父親と同じように対応しておりました。私は「韓国・歴史研究者崔書勉様へのサービスの充実」というだけではなく「人間・崔書勉先生の困っている事に少しでも力になれば」と感じ、又「昔のガキ大将のような強く優しい雰囲気」の崔書勉先生の喜ぶことをしたく（技術開発も進めつつ）働くようになっておりました。

● 「すぐに来れるか」

私が二代目社長となった後も様々なご要望を用意された上で「すぐに来れるか」と呼びが掛かることがあります。「今忙しいのに・・・」という状態の時もお会いして帰る時には「無理して時間を作って来てよかった！」と毎々そのように感じるのである時も「森松くん 外交史料館の待合室まですぐに来れるか」との事、何はさておき駆けつけました。崔書勉先生曰く

「外交史料館において所蔵されている韓国関連資料をまとめた『韓国関係史料選定目録』（崔書勉文庫）が出来上がったので とても嬉しい。それを作るのに協力してくれた内藤さんと森松さんと一緒に記念写真を撮りたかった」

とのことでした。『目録』を持ち写真を撮られる時、崔書勉先生の長年のご努力の一部が大成されて形となった喜びをほんの少しだけ共有させていただけた嬉しい瞬間でした。

● クリスチャン

史上稀にみる研究者魂の塊 崔書勉先生のその「情熱の源泉」は「周りの人を愛そうと想う気持ち・聖書の唱える

心」が基本となっているように見受けられます。

私人としては、「研究者」も「企業家」も「政治家」も、「私利私欲」「学閥競争」「党利党略」も悪ではなく、国益なども見据えながらそれぞれの「生活の安定」と「人格の形成」への試行錯誤の途中経過点であり、それを否定しない考え方もあると感じております。

崔書勉先生の場合、「それらとの関わり意に介さず」と常に担蕩々とし我が王道を闊歩する風貌であり、又時に「それらをも強力な味方にしてしまう」人間力を合わせてもっておられるように感じております。

各研究者は（経営者であっても）その「最終目標」が、「周りの人を自分と同じ様に許し愛おしむ心」それが組織を愛おしむ心となり、自国民・東アジア・世界の人々を許し愛おしむ心へと繋がるように見据えて歩みたい処です。又そうでなければ崔書勉先生のような「愛情を基礎とした情熱」に辿り着く事ができないとも感じております。

#### ●安重根氏

韓国において熱狂的ファンを有する最たる人と聞いておりました。

安重根氏は、国民を愛し 国を憂いながら「東洋平和論」を唱えました。

伊藤博文氏は、国民を愛し 国を憂いながら「極東平和論」を唱えました。

両人の考え方や方法は全く異なりますが、双方の国民の立場となつて記録を見ると、命を賭して「祖国の平和」と「東アジアの平和」を信じ貫いた両人の魂は永遠の存在でありそれぞれの祖国で英雄となりつつも、ある意味 両人ともが歴史の中における多大なる加害者 且つ多大なる被害者であると思えてならない。伊藤博文氏のご遺骨は安置されており、安重根氏のご遺骨は未だ確認することができない。

安重根氏研究のスペシャリストでもある崔書勉先生のサポートをさせて戴きましたが、未だご遺骨は見つかっておりません。現在も崔書勉先生が情報収集なされており、それも期待しつつ今後の可能性を試さなければなりません。

●歴史を「区切る」時

【日韓談話室の方々をとおして感じていること】

世界中において、壮絶なパワーバランスゲーム・利益争奪戦が絶える事はありません。

「個人対個人」とは違い「国対国」となれば、明確な証拠・根拠も無く国益を譲り合うことは有り得ません。

まして隣国韓国であれば、同類のモンゴロイドでもあり 儒教・仏教やキリスト教など 外部からの宗教的な影響を比較的素直に受入れてきた価値観の遠くない国同士であっても、過去より「他国からの防御・国益」の為に「良い意味・悪い意味」において利用し合う事が多発してしまいます。

戦後から現在にかけても「両国の安寧・発展のため」に双方から多くの優れた人材が「談話」をされ、双方力を尽くして来られたが、お互いの努力の効果が認められにくい日々を重ねている。

法人の「運営」の場合、「社会貢献：利益」と「失敗：損失」を毎日・毎週・毎月数値化する。そして一年毎に「過去に遡り」PL（損益計算書）とBS（貸借対照表）で大きく「区切る」事を行います。双方の数値化された数字から「事実を把握」その「理由を確認」しながら未来に向けて「短期・中期・長期目標を作成」して各部署が協力し合いながら「運営」してゆきます。

今後 世界又は東アジアの各国間において「過去に各国間でどのような利害を与え合ってきたか」そのようになつた本当の理由は何と何か？ の再確認が必要。現在友好関係を維持している国またはそれが難しい国同士であっても「紳士な態度を競い合うような姿勢を維持」し、各国の「記録」から見た「歴史観」を検分し直すための「談話の場」が必要であろう。未来に向けて各国とどう「運営」してゆくべきか？ 「未来へのルール」を作る為、「談話の基本」に先ずは「過去に遡り」「事実を把握」「理由の確認」を行い、今一度 歴史を大きく「区切る」時である。

● 談話主義（温故知新）

「未来へのルール」づくりに邁進しようとする準備する時、過去に先達方が経験してきた様々な「失敗事例」と「成功事例」を参考にすることが必要である。日本国内の記録を顧みただけでも「反面教師・教師」が多く確認できる。

例えば 織田信長から学べる事は、「身分や一宗教に固執しない合理的な思想」「武力による制圧」「主な人物（既得権益者含む）との談話の不足」（結果：旧既得権益者達も絡んだであろう武力で志半ばとなる）

勝海舟から学べる事は、「世界と東アジア・日本を比較できる視点」「東アジア共存の姿勢」「損得の調整・主な人物（既得権益者含む）との談話を諦めず実行」（結果：江戸城無血開城を成功）等からも学習できる。

歴史学者曰く「新しい社会の規則を作るときに助けとなることは既得権益者の譲歩である」との事、それも領ける。

「一度構築された既得権益を得る状態」の人が、後日明らかに「社会の罪」であると判断できる権益となったとしてもそれを手放した時の様々なリスクを考えるとそれを持ち続けようと「強引にしがみ付く事」は当然かもしれない。

しかし「その周りに集まる人達」は既得権益にあやかろうと画策する者ばかりとなり、そのような人間の関係では「幸福」とは正反対な精神状態に陥ろう。又自分の中の「善意」に背を向け続ける事ほど悲しく苦しい人生は無い。

そして「社会の罪」を承知で出来上がっている組織であればいつかは「お天道様」・「正義を名乗る他の人達」等から必然と排除されるであろうし、その恐怖から逃げる事はできない。

排除する側は「見せしめ」とせずになるべく穏便に犠牲が出ないように知恵を出さなければならない。何故ならば「更なる未来における仕組み作りの時」に「社会の罪から脱する為の『ルールの更新』」をより行い易くしておく為に「社会の罪となる既得権益者達が退陣を「恐怖する前例」を重ねず「人道的に対応する前例」が必要だからである。その為には良識ある人々が主体となり「社会の罪」から解放される手だてを事前に用意する必要が生じる。勝手乍ら「社会の罪」とは「地球環境の保全」と殺し合いのより少ない世界の平和」に「逆行する行為」と考えられよう。

「格物の天地造化におけるは却つて易く、人情世故におけるは却つて難し」佐久間象山の経験からも「自然の理」を究める折りの「人間の愚かさ」が読み取れる。第二次世界大戦において日本人は膨大な爆弾の雨の下で容赦無く叩き潰され（私の両親が十代の頃）、日本国民は戦争の醜さ卑劣さ苦しさを心底経験し、加害者としても被害者としても絶対に繰り返さない為に、自他を許しながら「世界平和 共存の道」を歩むことを諦めずに現在に至っております。

今後こそ「世界への貢献の結果を出せた者が賞賛される」仕組み（新しいルール）を真摯に作成し、同時に P D C A（計画・実行・評価・改善）巡回ルールの構築が必要となろう。

「談話」をいくらかさねても「各国・各個人」の「思想の統一」「感情の共有」を図る事は不可能かもしれない。しかし「地球環境の保全」と「世界平和」という「目的の統一」「利益の調整」を図る為のルールを創ってゆく事、それは談話を諦めなければ可能である。

「談話」は「理想」を論ずるのみで終わらせてはならない「現実の最初の一步」である。

#### ●談話主義（武力と虚言からの脱却）

世界各国が「武力と虚言」を後ろ盾に用いず、自他の卑怯を更生させながら「知識と良識」に基づいて（民主・共産 拘らず）先ずは「紳士に談話する主義」を定め、世界中の歴史検証者と良識人が集り 数万時間を費やしてでも「談話を開始するためのルール」を改めて作る時である。

第二次世界大戦中・後、大量殺戮兵器が様々な国で準備され、国・民族・宗教・利益争奪等の諸問題において、武力的恫喝で駆引きし合う中、「人間」はいざという時にはお互いを許し愛おしみ合う「神の子」となるのか？ 絶えず弱肉強食となりうる「動物に毛の生えたレベル」であるのか？ を各人が立証するラストチャンスとなろう。

先ずは各国間との「談話」において「お互いの過去・歴史の確認」そして今後の「利益分配ルールの作成」、それを実行しようとする時に阻害することが予測される「既得権益者等の確認」そして「その人達に平和協力賞を捧げつ

つ等の安全な引退の方法・生命と生活を保障するルール」を煮詰めてゆく人物が要求される。江戸城無血開城時の勝海舟の様な命がけて「談話」を諦めず進める事ができる逸材・英雄の登場が必要となる。

### ●英雄の登場

崔書勉先生の場合、私が考えている「英雄の要素」がほぼ当てはまってしまうのである。東アジアに在りながら「世界に人脈」を持ち「記録に基づく視点」でものを解釈でき「様々な人たちと談話」を繰り返えされ「多くの人を愛し」そして「人心を大切に扱う」（聖書の教えを実践しようという心がけている）人物と見える。

崔書勉先生は現実主義者・哲学者の様に見えるが無邪気で涙もろい《映画を見て涙する》。又強面のガキ大将の様に見えるが弱い者に優しい《女性にも特に優しい》。世界の歴史に強く残る「英雄」の素質：とも感じております。日本国にもまだまだ隠れた逸材・英雄が在るはずであり、そのような逸材が東アジアや世界との「談話の舞台」を今一度作りだし、そこに登場して（崔書勉先生と協力し合い）世界の有識者と共に先ずは東アジアの平和・世界の平和へという「共通の目的」への線路の構想を練ってゆく時と感じております。

### ●日韓の怪物

しかし、崔書勉先生は徹底した「反日思想家」と見える。

【反日の根幹に何があるか！に真剣に耳を傾ける日本人が多くないと思える、その事が大きな原因であろう】

【日本人の多くがそうなっている根幹に何があるか！】などを更に深く談話する必要があるでしょう。

その崔書勉先生の周りになぜ多くの日本の知識人・良識派の人達が集まってしまうのでしょうか？

私（知識も良識も欠けるが）の場合、日韓談話室 崔書勉先生を囲む会に参加を希望する理由は、

・ 只者ではない日韓談話室のメンバーの方々

・ そのメンバーの方々との間において ある程度腹を割って談話する「場」

・ そして「日本と韓国」という「場」において（ハーバード流交渉術に例えれば）一階庭のテーブルでの「談話」

を二階のバルコニーから俯瞰できる視点・そして知識・知恵・経験と心を持たれる崔書勉先生方が在り、

・ 崔書勉先生が見事に采配を振るわれる。時として極東平和・東洋平和 前進への一歩と思える機会もあり、その

「談話の場」に参加させて戴くことにより 震えるような緊張感をも経験できるからです。

若輩・浅学・武勇なきものながらも日韓談話室の末席を十数年にわたり頂戴させていただき 崔書勉先生及び日韓談話室の皆さまに心より感謝しております。

二〇一二年 崔書勉先生は日本上陸 五十五年となり、五月二十六日のお祝いの会において「花束だけでなく何か記念になるものを崔先生にプレゼントをしたいよね」との日韓談話室メンバーの一部の方のお言葉から時間がかかりましたが崔書勉先生への『寄稿集』が皆さまの手作りで作成できました。

韓国から日本へ世界へと歩まれ、様々な難題に遭遇され乗り越えながらの五十五年間、改めてお慶び申しあげます。

通常の人間の想像を遥かに超える日々の蓄積であり、そのほんの一部也を共有させて戴く感動の時に感謝いたします。

「日韓の怪物 崔書勉」の代理は 神様 (something great) がどのようにあがいても創ることはできません。

これからの崔書勉先生 そして談話室の皆さまのご健康を心よりお祈りいたします。

皆が在る幸せに感謝しつつ

(乱筆乱文 失礼いたします)

二〇一二年 平成二十四年 八月 吉日